
高校野球選手の試合態度等とあがり徴候の関係について

坂入保世¹ 橋口泰武¹ 榊 博文²

¹日本大学 ²慶応義塾大学

The Relationships between Attitudes toward the Games and Symptoms of Stage Fright
of Senior High School Baseball Players

Hose SAKAIRI¹ Yasutake HASHIGUCHI¹ and Hirobumi SAKAKI²

¹Nihon University ²Keio University

はじめに

日本における体育・スポーツ関係にみられる”あがり”研究は1964年の東京オリンピック大会を契機に始められてきたようである。日本体育協会では1961年東京オリンピック大会に備え選手の精神面の強化策として”あがり”防止の為の研究を取入れ、その後13年間に渡り9回の研究報告をしている。それを期に個人研究者においても”あがり”の解明と防止策についての研究が多数行われてきた。このような経緯の中、ロスアンゼルス・オリンピック大会で日本選手が惨敗した後、日本体育協会はプロジェクトチームをつくり「スポーツ選手のメンタル・マネージメントに関する研究」^{4) 7) 8) 9) 10)}など精神面の強化の研究に取り組んでいる。これらの一連の研究においては、主に”あがり”防止対策の立場から”あがり”がなぜ起るのか、その起因を探るべく、経験年数、^{1) 3) 18)}自信の度合い¹⁾技術レベル^{3) 18) 19)}性格^{6) 16)}価値観¹²⁾感性¹⁷⁾などから要因分析がされてきた。しかしながらそれらの多くは尺度や対象者の違いからか必ずしも一致した見解に至っていないように思える。そこで本研究グループでは、あがりの要因を探るべく、日・米高校野球選手を対象に属性・態度等と”あがり”の指標とされる不安テスト及び徴候テストの調査を行った。今回の報告では日米選手の属性・態度等と徴候テ

ストとの関係についてのみ分析を試みた。なお”あがり”の定義なり概念については、多くの研究者¹⁴⁾がそれぞれの立場から論じているが、本研究グループでは”あがり”の概念を「内的・外的条件による心的葛藤で過度の情動的緊張を生じ、行動の遂行が不適当となり、能力が十分に発揮できないような、心理的・生理的現象である。」と規定する。

方法

(1) 調査対象者及び調査時期

調査対象者はアメリカ人高校生野球選手170名(以後アメリカ選手と呼ぶ)と日本人高校生野球選手180名(以後日本選手と呼ぶ)であった。調査用紙の回収はアメリカ選手85名(50%)日本選手149名(83%)であった。調査日の設定にあたってはアメリカ選手の場合 Goodwill Series(日本・韓国・アメリカの親善試合)の選手選考大会である 5th ANNUAL AREA CODE BASEBALL GAMES(Fresno に於て、1991年8月17日~20日開催された)の第一回戦に設定した。日本選手の場合は1991年、各都県の秋季大会(9月上旬)の地区予選(東京、千葉、埼玉、静岡)の第一回戦に設定した。

(2) 調査方法及び分析

調査は質問紙法を採用し、質問紙は属性・態度

坂入保世ほか

等に関する質問、不安テスト、徴候テストの3種類である。属性・態度等に関する質問については、日・米選手を調査対象としたので、両者の間にスポーツに取り組む姿勢・環境及び日常生活における態度（自己評価）等に相違があるものと推論し、これまでの調査にそれらを加味して質問紙を作成した。表1に示す通りである。不安テストは橋本

等²⁾が翻訳したCSAI-2の日本語版を用いた。徴候テストは、坂入¹⁵⁾などが1987年に作成した30項目5段階尺度（1、全く感じなかった～5、非常に感じた）を用いた。そして各調査結果を日米間で比較するとともに、属性・態度等とあがり徴候との関連を分析した。なお、徴候テストは試合中に心理的、生理的にどのような徴候がみられ

表1 属性・態度等に関する調査用紙

- 属性態度調査
- 下記の質問にお答えください。7～18問では該当する記号に×印を付けてください。
- | | | |
|---------|-----------------------|----|
| 1、氏名 | 2、性別 | 男女 |
| 3、年齢 | 4、出身地 | |
| 5、ポジション | 6、今大会に出場したスポーツ種目の経験年数 | |
- 7、試合前の自信の程度についておききます
 ①非常に自信があった
 ②すこし自信があった
 ③全く自信がなかった
- 8、試合中の態度についておききます
 ①常に楽しんでプレーできた
 ②あまり楽しくなかった
 ③全く楽しくなかった
- 9、試合中の不安の頻度についておききます
 ①全く不安を感じないでプレーできた
 ②時には不安を感じてプレーした
 ③常に不安を感じてプレーした
- 10、試合を臨むにあたり、試合前1週間の体調はいかがでしたか
 ①いつもより良い
 ②いつも通りである
 ③いつもより悪い
- 11、試合に臨むにあたり、あなたが一番プレッシャーを感じた時期はいつですか
 ①試合の2、3日前
 ②試合の直前
 ③試合中
- 12、スポーツを何の為にやっていますか（1つだけ）
 ①楽しいから
 ②気分転換になるから
 ③健康に良いから
 ④技術を高めたいから
 ⑤勝ちたいから
 ⑥好きだから
 ⑦友達を作りたいから
 ⑧監督（コーチ）または友達に進められたから
 ⑨両親から進められた
- 13、競技（試合）に臨む態度について
 ①どうしても勝ちたい
 ②できれば勝ちたい
 ③勝っても負けてもよい
- 14、プレーの結果について親、兄弟または友達に目が気になりますか
 ①とても気になる
 ②少し気になる
 ③全く気にならない
- 15、あなたのプレーに対する親の態度についておききます
 ①両親とも熱心である
 ②父親だけ熱心である
 ③母親だけ熱心である
 ④両親とも熱心でない
- 次にあなた自身の日常生活での態度についておききます
- 16、日常生活を省みてあなたは自分自身は明るい性格だと思いますか
 ①非常に明るいと思う
 ②普通であると思う
 ③暗い方だと思う
- 17、人前で話したり、競技にでた場合緊張しやすいですか
 ①非常に緊張する
 ②緊張する時もある
 ③全く緊張しない
- 18、日常生活では自信をもって行動する方ですか
 ①何事にも自信をもって行動する
 ②時には（場合によっては）自信をもてないこともある
 ③ほとんど自信をもって行動していない

たかを自己評価させたものである。これに類似したテストは市村⁵⁾が1965年に作成し、その後“あがり”の指標として幾多の研究で用いられてきた。

調査用紙の配付及び回収は各チームの監督に調査目的と調査方法を説明し調査用紙の配付及び回収を依頼した。

データの処理及び分析にあつては次に示す通りである。属性・態度等に関しては、尺度評価できる項目を5項目以下に並べたため、質問紙とは順序を異にした(表2)。また今回の分析では地域

別の分析は実施しなかった。尺度評価できない項目は、「参加状況」の項目では〔先発投手〕〔先発野手(捕手も含む)〕〔中途出場〕〔出場無し〕に分類し、「守備位置」の項目では〔投手〕〔捕手〕〔内野手〕〔外野手〕に分類した。「野球をしている目的」の項目では〔楽しいから〕と〔好きだから〕をまとめて〔好きだから〕とし、〔気分転換になるから〕と〔健康に良いから〕をまとめて〔健康に良いから〕とした。さらに〔技術を高めたいから〕〔勝ちたいから〕を加えて4カテゴリーに分類した。分析は属性・態度等の質問に

表2 日米選手の属性・態度における度数と平均値の差の検定

質問項目	グループ名	平均値	Total	1	2	3	4	t-得点	p
			n	f (%)	f (%)	f (%)	f (%)		
参加状況	America		35	6 (7%)	37 (44%)	12 (14%)	30 (35%)		
	Japan		148	8 (5%)	60 (41%)	21 (14%)	59 (40%)		
守備位置	America		35	25 (29%)	13 (15%)	26 (31%)	21 (25%)		
	Japan		145	21 (14%)	13 (9%)	62 (43%)	49 (34%)		
理由	America		32	71 (87%)	0 (0%)	7 (8%)	4 (5%)		
	Japan		139	104 (75%)	3 (6%)	11 (8%)	16 (11%)		
親の関心度	America		35	77 (90%)	4 (5%)	4 (5%)	0		
	Japan		146	79 (54%)	26 (18%)	4 (3%)	37 (25%)		
試合に臨む自信	America	1.365	35	54 (64%)	31 (36%)	0 (0%)		5.593	***
	Japan	1.310	147	46 (31%)	83 (57%)	18 (12%)			
試合中の態度(楽しみ)	America	1.035	35	83 (98%)	1 (1%)	1 (1%)		11.856	***
	Japan	1.852	142	38 (27%)	87 (61%)	17 (12%)			
試合中の不安	America	2.035	35	11 (13%)	60 (71%)	14 (16%)		1.250	
	Japan	1.935	137	30 (22%)	86 (63%)	21 (15%)			
試合前の体調	America	1.941	35	18 (21%)	54 (64%)	13 (15%)		2.058	*
	Japan	2.082	147	8 (5%)	119 (81%)	20 (14%)			
プレーヤーを感じた時期	America	2.082	35	9 (11%)	60 (70%)	16 (18%)		1.355	
	Japan	2.201	144	23 (16%)	69 (48%)	52 (36%)			
試合結果に対する気付き	America	2.329	35	6 (7%)	45 (53%)	34 (40%)		1.919	
	Japan	2.163	147	21 (14%)	81 (55%)	45 (31%)			
勝敗へのこだわり	America	1.553	35	46 (54%)	31 (37%)	3 (9%)		4.662	***
	Japan	1.215	147	116 (79%)	30 (20%)	1 (1%)			
年齢	America	16.833	35	2 (2%)	21 (25%)	48 (46%)	14 (17%)	6.434	***
	Japan	16.260	146	21 (14%)	66 (45%)	59 (41%)			
経験年数	America	11.235	35	1 (1%)	3 (4%)	62 (73%)	19 (22%)	11.570	***
	Japan	7.497	144	25 (17%)	65 (45%)	53 (37%)	1 (1%)		
日常生活での明暗	America	1.750	34	37 (44%)	31 (37%)	16 (19%)		0.214	
	Japan	1.769	147	44 (30%)	93 (63%)	10 (7%)			
日常生活での緊張度	America	2.012	34	9 (11%)	65 (77%)	10 (12%)		1.207	
	Japan	1.925	147	28 (19%)	102 (69%)	17 (12%)			
日常生活での自信	America	1.345	34	55 (65%)	29 (35%)	0 (0%)		8.270	***
	Japan	1.884	147	26 (18%)	112 (76%)	9 (6%)			

***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05

において尺度評価できる項目は平均値と標準偏差値を求め、日・米選手の差を検定をした。徴候テストでも同様な分析を試みた。また属性・態度等と徴候テストの関わりをみるために、属性・態度等の尺度化した12項目と徴候テストの30項目の相関値を求めた。なお坂入¹⁵⁾などは徴候項目を因子分析して5因子を抽出しているが、今回は自律神経系の混乱II因子を除く4因子(自己制御の混乱因子、自律神経系の混乱I因子、劣等感情因子、不安感情因子)の総合得点を求めて、各因子における日・米選手間の平均値を算出し比較した。さらに日・米選手双方のあがり徴候の各因子と属性・態度等の相関値を求めた。

結果と考察

(1) 属性・態度等における日・米選手間の比較について

表2は日・米選手の属性・態度等における度数、平均値および差の検定結果である。16項目のうち日・米選手間に違いがみられた項目は、「親の野球に対する関心度」「試合に臨む自信」「試合中の楽しみ」「試合前の体調」「勝敗へのこだわり」「年齢」「経験年数」「日常生活での自信」など8項目である。「親の野球に対する関心」では、両親とも熱心な者は、アメリカ選手の場合77名(90%)、日本選手の場合は79名(54%)である。また両親とも熱心でない者は、アメリカ選手の場合は0名であるのに、日本選手の場合は37名(25%)であった。アメリカ選手の両親の方が子供のプレーに対し熱心である割合が多かった。「試合に臨む自信」の項目では、0.1%の危険率で有意な差がみられ、アメリカ選手は日本選手に比べより自信をもって試合に臨んでいることが理解できる。著者がアメリカ選手のプレーを見た限り、日本選手に比較して技術的に優れているとは思えなかったが、なぜこの様にアメリカ選手が自信をもてるのか、今回の調査では明らかにできない。しかし「日常生活での自信」の項目でも同様な傾向が伺えることから、国民性の違いがこの様な結果になった原因とも考えられる。

「試合中の楽しみ」の項目では、0.1%の危険率で有意な差がみられ、アメリカ選手が日本選手に比べ楽しんでプレーしていることが明らかである。アメリカ選手の場合、著者の感想では上手・下手にとらわれずプレー自体を楽しんでいることが伺えた。従って、このような相違は国民のスポーツへの取り組み方や、指導者の指導理念などの違いにあると考えられる。「勝敗へのこだわり」の項目については、0.1%の危険率で有意な差がみられ、日本選手の方がアメリカ選手より勝利への執着心をもっている。このことは日本では野球を指導する場合、楽しみより勝つことに主眼をおいている傾向に有り、一方アメリカでは「試合中の態度(楽しみ)」の項目から伺えるように、プレー自体を楽しんでいることが明らかであり、それらがこのような違いになったと思われる。「年齢」の項目では0.1%の危険率で有意な差がみられたが、アメリカ選手の場合上級生が中心であるのに対して、日本選手においては秋季大会(1,2年生)を調査対象とした事がこのような差になったと思われる。「経験年数」の項目でも0.1%の危険率で有意な差がみられたが、質問のとらえかたの違いが(規準)このような結果になった一因とも思われる。すなわち、アメリカ選手の場合は親とキャッチボールを始めた時点を基準にしているようだが(回答に数人銘記されていた)、日本選手の場合はどこかのチームに所属した時点を基準にしていると思われた。「日常生活での自信」の項目でも0.1%の危険率で有意な差がみられ、アメリカ選手の方が日本選手に比べ日常生活において自信をもって行動していることが伺えた。

この属性、態度等の調査で知り得たことは、試合に対する態度あるいは試合中の態度がアメリカ選手と日本選手で大きな相違がみられたことである。この事は、我々が予測していた結果とほぼ類似していたが、自信の程度や、試合における楽しみの度合いでは予測を越えていた。

(2) 徴候テストにおける日・米選手間の比較

表3は徴候テストにおける日・米選手の平均値と差の検定である。30項目中、5%以上の危険

表 3 徴候テストにおける日米選手の平均値の差の検定

Items	Group	Mean	S D	total	1	2	3	4	5	t-score	p
1. 鼓動が激しくなった	America Japan	2.338 2.196	1.106 1.038	80 148	23 42	21 56	25 34	8 11	3 5	0.956	
2. 胸がしめつけられる	America Japan	1.575 1.885	0.877 1.043	80 148	49 67	21 48	6 22	3 5	1 6	2.252	*
3. 失敗への不安	America Japan	2.500 2.548	1.245 1.234	80 146	20 36	24 40	20 35	8 24	8 11	0.277	
4. 失敗への気がかり	America Japan	2.063 2.525	1.155 1.427	80 141	34 46	21 35	14 20	8 3	3 20	2.463	*
5. 劣等感にとらわれた	America Japan	1.855 2.361	1.012 1.189	80 147	39 46	17 34	19 44	4 14	1 9	3.000	**
6. 他人が上手に見える	America Japan	3.488 2.628	1.255 1.317	80 148	7 35	11 46	19 21	22 31	21 15	4.759	***
7. 不必要な動作に力が入る	America Japan	1.438 2.356	0.754 1.163	80 146	54 40	20 43	4 32	1 18	1 8	6.339	***
8. 気分的に疲れた	America Japan	1.813 3.021	1.050 1.306	80 146	42 46	20 19	11 47	5 30	2 23	7.079	***
9. 行動について 正誤の判断がつかない	America Japan	2.275 1.912	1.284 1.033	80 148	31 65	16 48	20 22	6 9	7 4	2.309	*
10. 他人が落ち着いてみえる	America Japan	3.088 2.000	1.015 0.962	80 147	6 51	13 60	36 23	18 11	7 2	7.945	***
11. 注意力がなくなった	America Japan	1.763 2.184	1.003 1.050	80 147	43 44	20 53	12 34	3 11	2 5	2.920	**
12. 体の震え	America Japan	1.400 1.689	0.784 0.877	80 148	59 78	13 46	6 17	1 6	1 1	2.455	*
13. 落ち着こうと思うがより不安になる	America Japan	1.538 1.932	0.790 1.050	80 148	51 63	16 52	12 17	1 12	0 4	2.930	**
14. 体がいうことをきかない	America Japan	1.700 1.972	0.927 1.030	80 145	45 61	18 42	14 30	2 9	1 3	1.957	
15. もの忘れ	America Japan	1.838 1.939	1.145 1.054	80 148	44 61	18 55	8 18	7 8	3 6	0.671	
16. 考えが纏まらない	America Japan	1.875 1.959	1.177 0.971	80 146	44 54	16 58	9 24	8 6	3 4	0.573	
17. 行動に自信がなくなる	America Japan	1.688 2.048	0.903 1.116	80 145	46 56	16 49	15 25	3 7	0 8	2.467	*
18. 身体への制約が厳しい	America Japan	1.425 1.849	0.738 0.989	80 146	56 66	16 50	6 20	2 6	0 4	3.345	**
19. 審判員に恐怖を感じた	America Japan	1.450 1.368	0.879 0.848	80 144	60 112	8 21	9 5	2 2	1 4	0.681	
20. 音がかわいた	America Japan	1.450 2.027	0.835 1.227	80 146	56 63	17 36	3 22	3 10	1 10	3.742	***
21. 行動への焦り	America Japan	1.725 2.007	1.012 1.126	80 146	46 59	17 52	12 18	3 9	2 8	1.856	
22. 試合の時にあわてる	America Japan	1.788 2.021	1.033 1.034	80 145	45 58	15 43	12 28	8 15	0 1	1.613	
23. 喉の渇き	America Japan	3.025 2.687	1.597 1.266	80 147	21 32	13 36	14 41	7 22	25 16	1.740	
24. 体のかたさ	America Japan	1.613 2.055	0.873 1.009	80 145	47 54	21 43	9 36	2 10	1 2	3.287	**
25. 掌に汗をかく	America Japan	1.638 2.090	1.015 1.174	80 145	50 58	17 43	8 26	2 9	3 9	2.885	**
26. 尿意をもよおす	America Japan	1.550 1.633	1.128 0.983	80 147	59 89	11 38	2 9	3 7	5 4	0.571	
27. 時間が短く感じた	America Japan	2.138 2.562	1.394 1.288	80 146	39 38	15 40	12 31	4 22	10 15	2.278	*
28. 集中力がなくなる	America Japan	1.600 2.247	0.917 1.070	80 146	50 44	16 44	12 40	0 14	2 4	4.545	***
29. 漠然と不安を感じた	America Japan	2.938 2.527	1.288 1.153	80 148	13 35	16 37	28 47	9 21	14 8	2.449	*
30. 冷や汗がでた	America Japan	1.400 1.463	0.917 0.749	80 147	62 97	11 36	3 1	1 2	3 1	0.552	

***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05

率で有意な差があった項目は19項目であり、その内アメリカ選手の平均値が高かったのは「他人が上手に見える」「行動について正誤の判断がつかない」「他人が落ち着いてみえる」「喉の渇き」「漠然と不安を感じた」の5項目で他の14項目は日本選手が高かった。このことは全般的に日本選手の平均値が高く、徴候がみられたと言える。アメリカ選手の「喉の渇き」については調査日の当日、開催地であるFresnoは猛暑であり、心理的面より生理的な影響が強いと推察できた。この様に日米選手間において約2/3の項目で差がみられたが、気象条件、大会の雰囲気、大会運営等の違いもあり単に数値だけで判断することはできないと思われた。

表4は徴候4因子項目における日・米選手の平均値と差の検定である。日本選手は自己制御の混乱因子、自律神経系の混乱因子で米国選手に比べ徴候の度合いが有意に ($p<0.001$)高いことが明瞭である。すなわちアメリカ選手は日本選手に比べ「自己制御の混乱」および「自律神経系の混乱」が少ないと言える。しかし劣等感情因子では有意な差がみられないがアメリカ選手の方が平均値が高く、また項目別での比較では「他人が上手に見える」「他人が落ち着いてみえる」項目で有意な差がみられていることから、アメリカ選手の場合日本選手に比べ、劣等感情が強い傾向にあることが伺える。

(3)属性・態度等と徴候テストにおける日・米選手間の比較

表5及び6は属性・態度等と徴候因子項目における相関値である。有意な相関がみられた項目をあげると次の通りである。

自己制御の混乱因子ではアメリカ選手の場合「試合結果に対する気がかり」($r=-0.297, P<0.01$)、「試合に臨む自信」($r=0.231, P<0.05$)、「試合前の体調」($r=0.262, P<0.05$)、「プレッシャーを感じた時期」($r=0.283, P<0.05$)、「年齢」($r=0.277, P<0.05$)の5項目で有意な相関がみられた。日本選手の場合は「試合中の不安」($r=0.346, P<0.001$)、「試合中の楽しみ」($r=0.297, P<0.001$)、「試合前の体調」($r=0.271, P<0.01$)、「試合結果に対する気がかり」($r=-0.261, P<0.01$)など4項目で有意な相関がみられた。自律神経系の混乱因子では、アメリカ選手の場合「試合結果に対する気がかり」($r=-0.256, P<0.05$)、「年齢」($r=-0.273, P<0.05$)の2項目で有意であり、日本選手の場合は「試合中の不安」($r=0.297, P<0.001$)、「試合結果に対する気がかり」($r=-0.318, P<0.001$)、「試合前の体調」($r=0.189, P<0.05$)、など3項目で有意な相関がみられた。劣等感情因子では、アメリカ選手の場合「日常生活での自信」($r=0.230, P<0.05$)の1項目で有意な相関がみられた。日本選手の場合は「試合に臨む自信」($r=0.229, P<0.01$)、「試合中の不安」($r=0.279, P<0.01$)、「試合前の体調」($r=0.174, P<0.05$)、「勝敗の関心度」($r=0.205, P<0.05$)、「経験年数」($r=-0.267, P<0.01$)など5項目で有意な相関がみられた。不安感情因子ではアメリカ選手の場合「試合結果に対する気

表4 徴候テストの因子項目における日米選手の平均値の差の検定

項目名	グループ名	平均値	S D	total	t 得点	p
自己制御の混乱	America	16.888	6.508	80	3.373	***
	Japan	20.136	7.373	140		
自律神経系の混乱	America	11.713	3.976	80	3.898	***
	Japan	13.965	4.199	143		
劣等感情	America	14.263	3.820	80	0.843	
	Japan	13.776	4.265	143		
不安感情	America	10.532	3.419	79	1.002	
	Japan	11.633	9.382	139		

***: $p<0.001$. **: $p<0.01$. *: $p<0.05$

表 5 アメリカ選手の属性・態度と徴候因子における相関値

属性・態度項目 徴候因子	試合に臨む自信	試合中の楽しみ	試合中の不安	試合前の体調	プレッシャーを感じた時期	試合結果に対する 気がかり	勝敗へのこだわり	年齢	経験年数	日常生活での 明るさ	日常生活での 緊張度	日常生活での 自信
自己制御の混乱	* .231	-.044	+.193	* .262	* .283	** -.297	.023	* -.277	-.140	-.001	-.053	.165
自律神経系の混乱	+.205	+.201	-.021	.066	.111	* -.256	.001	* -.273	-.110	-.001	.131	+.217
劣等感情	.129	-.050	.176	.102	.158	-.155	.051	-.183	.063	.082	-.065	* .230
不安感情	** .320	.125	+.183	.157	.112	*** -.404	-.079	* -.239	-.156	.105	-.139	** .325

***:p<0.001. **:p<0.01. *:p<0.05. +:p<0.1

表 6 日本選手の属性・態度と徴候因子における相関値

属性・態度項目 徴候因子	試合に臨む自信	試合中の楽しみ	試合中の不安	試合前の体調	プレッシャーを感じた時期	試合結果に対する 気がかり	勝敗へのこだわり	年齢	経験年数	日常生活での 明るさ	日常生活での 緊張度	日常生活での 自信
自己制御の混乱	.125	*** .297	*** .346	** .271	+.154	** -.261	-.081	.019	-.064	-.001	.045	+.164
自律神経系の混乱	.011	.147	*** .297	* .189	.121	*** -.318	-.047	.031	-.027	-.124	-.082	.102
劣等感情	** .229	.020	** .279	* .174	.082	-.086	* .205	-.123	** -.267	.033	-.110	.048
不安感情	* .170	** .234	*** .469	** .265	.126	*** -.289	.028	-.001	-.052	.024	-.029	+.153

***:p<0.001. **:p<0.01. *:p<0.05. +:p<0.1

がかり」(r=-0.404, P<0.001), 「試合に臨む自信」(r=0.320, P<0.01), 「日常生活での自信」(r=0.325, P<0.01), 「年齢」(r=-0.239, P<0.05)など4項目で有意な相関がみられた。日本選手の場合は「試合中の不安」(r=0.469, P<0.001), 「試合結果に対する気がかり」(r=-0.289, P<0.001), 「試合前の体調」(r=0.265, P<0.01), 「試合中の楽しみ」(r=0.234, P<0.01), 「試合に臨む自信」(r=0.170, P<0.05)など5項目で有意な相関がみられた。以上の結果から日・米選手双方に類似して相関がみられた項目は「試合結果に対する気がかり」であり、劣等感情を除く他の3因子と相関がみられた。このような「結果に対する不安」についての分析がこれまでの報告でなかったと思われることから、今後は「あがり」要因の一つとして更に調査する必要性を感じた。また「試

合に臨む自信」項目でアメリカ選手の場合「自己制御の混乱」「不安感情」因子で、日本選手の場合「劣等感情」「不安感情」因子で相関がみられた。このことは橋口¹⁾などは「自信」と「あがり意識」、武田¹⁷⁾などは「失敗不安」と「あがり」に相関があると示唆しているが、それらと類似した結果であった。次に日本選手に相関がみられずアメリカ選手に相関がみられた項目は「年齢」「日常生活での自信」であった。また日本選手に相関がみられアメリカ選手に相関がみられなかった項目は「試合中の態度(楽しみ)」「試合中の不安」「試合前の体調」であり、特に「試合中の不安」「試合前の体調」の項目は4項目とも相関がみられ、アメリカ選手との違いがみられた。このような相違は日・米選手の試合前や試合中での取り組みかたに、関連があるのではないかと考えられ

た。

なお今回徴候テストを分析するにあたり、坂入¹⁵⁾などが以前に調査した自動車検定受験者と今回調査した野球選手の平均値の差の検定を試みた。その結果日・米選手とも自動車検定受験者に比べ平均値が低く、アメリカ選手で26項目、日本選手で19項目で有意な差がみられた。このことは今後の調査に対し、種目、対象者、外的条件などの配慮と徴候の度合いの検査などの必要性を感じた。

結 論

本研究では、あがりの要因を探ろうとするものであり、日・米高校野球選手を対象に属性・態度等と”あがり”の指標とされる徴候テストを調査し、分析を試みたものである。調査条件で同一の条件が設定できず、また質問での解釈にやや相違がみられたと思われたが、下記のような結果が得られた。

(1)属性・態度等の日・米選手の比較では、試合に臨む態度等で特に「試合に臨む自信」「試合中の態度(楽しみ)」で日・米間に大きな違いがみられた。

(2)徴候テストにおいては、日本選手の方が各項目で高い数値を示しアメリカ選手より徴候が高かった。中でも「自己制御の混乱」「自律神経系の混乱」の項目で明確な差がみられた。

(3)属性・態度等とあがり徴候との関係では、「試合結果に対する気がかり」の項目で日・米選手双方で相関がみられ、「結果への不安」が”あがり”をもたらす大きな要因とも考えられた。また日本選手の場合、試合前や試合中の態度が徴候を高める要因になっている傾向が伺えた。

引用文献

1)橋口泰武他：「高校体操選手の”あがり”に関する研究—”あがり”の程度と「経験」「自信」「競技の成否」「あがり原因」「あがり徴候」との関係について—」, 日本大学生産工学部報告.18(1),49~66,1985
2)橋本公雄他：「スポーツ選手の競技不安の解消

に関する研究—競技前の状態不安の変化およびバイオフィードバック・トレーニングの効果—」福岡工業大学エレクトロニクス研究所所報, 第1巻,1984

- 3)堀安高綾他：「柔道選手のあがりについて」, 武道学研究.16(1),52~53,1984
4)猪俣公宏他：「チームスポーツ選手のメンタルマネージメントに関する研究」日本体育協会スポーツ科学研究報告集.vol.2,1987
5)市村操一：「スポーツにおけるあがりの特性の因子分析的研究」体育学研究,9(2),16~22,1965
6)松田岩男「運動選手の性格特性と”あがり”に関する研究」体育学研究,6(1),355~358,1961
7)松田岩男他：「チームスポーツ選手のメンタルマネージメントに関する研究—第1報—」, 日本体育協会スポーツ科学研究報告集vol.1,1985
8)松田岩男他：「チームスポーツ選手のメンタルマネージメントに関する研究—第2報—」, 日本体育協会スポーツ科学研究報告集vol.2,1985
9)松田岩男他：「チームスポーツ選手のメンタルマネージメントに関する研究—第3報—」, 日本体育協会スポーツ科学研究報告集vol.3,1987
10)松田岩男他：「チームスポーツ選手のメンタルマネージメントに関する研究—第4報—」, 日本体育協会スポーツ科学研究報告集vol.4,1988
11)西山逸成：「バイアスロン選手の射撃時における”アガリ”について」, 日本体育協会スポーツ科学研究報告集.1,208~210,1960
12)丹羽 昭他：「あがりとパーソナリティ—あがりにくい選手とあがりやすい選手の性格特徴を中心に—」スポーツ心理学研究,13(1),7~16,1965
13)スポーツ科学研究委員会心理部会：「あがりの研究」日本スポーツ科学研究委員会報告集.1~15,1960
14)坂入保世他：「”あがり”現象の原因から結果にいたるプロセスに関する一考察」, 千葉体育学研究.第14号,55~61,1991
15)坂入保世他：「あがりに関する研究—8—運動

- 免許仮検定時における受験者の人格とあがり現象」。日本体育学会第38回大会号A, 200, 1987
- 16) 豊田一成: 「アーチェリー選手の心理的適性に関する研究」スポーツ心理学研究, 13(1), 24~31, 1965
- 17) 武田徹他: 「陸上競技者の競技事態における不安について」スポーツ心理学研究, 8(1), 65~67, 1965
- 18) 谷口幸一他: 「体育大学生に見る”あがり”の徴候と競技歴の関連」, スポーツ心理学研究, 12(1), 39~46, 1985
- 19) 財満義輝他: 「競技前・競技中の心理的要因に対する選手と監督・コーチの評価」スポーツ心理学研究, 11(1), 58~62, 1984

(平成4年12月10日受付)